

色覚異常について

物理学講座 教授 小林恒夫

色覚異常は、昔は色盲か色弱と呼ばれて、小・中学校、高校、大学と至るところの教育現場で石原式色盲検査表[1]による“検出”が行われていました。色覚異常は、日本では男性の約 5%、女性の約 0.2%を占めるとのことです。

ところで私は色盲です。全色盲ではありませんが、昔流に言うと赤緑色盲です。

色盲に生まれて困ったことをいくつか挙げてみますと、人の顔色がわからない、椿や山茶花の赤い花が緑の葉の中に咲いているのに他人に指摘されるまで気がつかない、紅葉を皆が言うほど美しいとは思えない、肉や魚を焼く時にもう焼けたかどうかよくわからない、ノートパソコンの充電状況を表すランプのオレンジと緑の表示の区別がつかない、等々でしょうか。インターネットで、色覚異常の人たちがどんなふうに見えるかを示してくれるサイトもあります[2]。

高校生のときに眼科の先生から文系に進むことを勧められ、理系進学しか考えていなかった私としては愕然とした記憶があります。文系ですら色盲はお断りとする大学もある時代でした。結局は好きな物理を職業とすることができてよかったと思っています。理学部物理学科で困ったことは、抵抗のカラーコードが読めない、銅と真鍮の区別が付きにくい、真空度を見るガイスラー管で紫と青の区別がつかない、等々でした。

進路とともに心配だったのは、結婚してくれる相手が現れるだろうかということでした。お見合いの時には隠しておけと言われたものでしたが、とりあえず最初に切り出さずにはおられません。幸い、理解してくれる人が現れ、現在に至っています。

最近では、小学生から一貫して、色覚検査を行わなくなっているとのことで、自分が色盲とは知らずに大人になってしまう人達もこれからは出現するとのことです。これは困ったことだ、との論を展開しておられる眼科の先生方もおられます[3]。

医学部への進学も今は全く自由ですが、入学後はやはり不都合を生じてしまうのではないのでしょうか。人の顔色は、健康の大切な指標の一つですから、これがわからなかったら問診のときなど困ると思います。

「どうしてもものが見えるのか」という本[4]の終わりのほうに、詳しく色覚異常のことが書かれています。この著者は色覚異常でありながら医学部に進み生理学の教授となられたということです。興味のある方はご覧になられてはいかがでしょうか。

参考とした文献やホームページ

[1] 「石原忍の生涯」須田経宇著、講談社学術文庫、1984。

[2] <http://www.cudo.jp/>、<http://www.pastel.gr.jp/> など。

[3] 「色覚異常とプレゼンテーション使用色」中村・岡島著、電子情報通信学会誌第 86 巻、29-32 頁、2003。

[4] 「どうしてもものが見えるのか」、村上元彦著、岩波新書、1995。